

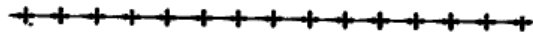
三修 大新 經藏 索引

第88冊

續經疏部 二上

新文豐出版公司 影印

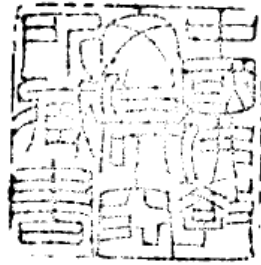
大新 正修 大藏經索引



第三十三冊

續經疏部

二上



新文豐出版公司 影印

大正 大藏經索引 第33冊 續經疏部二上

中華民國81年4月台1版

精1冊基價15.7元

編集者：大藏經學術用語研究會

發行者：高 本 釗

發行及印刷所：新文豐出版公司

公司：臺北市雙園街96號

電話：3060757・3088624

門市部：臺北市羅斯福路一段20號8樓

電話：3415293・3415294

台北郵政 3643 信箱

登記證：局版臺業字第0649號

郵政劃撥：01004426號

ISBN 957-17-0447-4 (套)

ISBN 957-17-0449-0 (第三十三冊：精裝)

出 版 說 明

本「大正藏續編索引」第三二至四八冊係根據大正新修大藏經續編第五六至八五冊所作諸內容索引，這是日本大藏經學術研究會邀請六所佛教大學——立正、大谷、大正、龍谷、駒澤、高野山等負責編撰本索引，深獲各界好評，特此推介學林，以公諸讀者。

凡其五五冊正編部份所作三一冊索引，業於民國六十九年景印刊行，屢經讀者多方詢問：何時得以全部出齊，以利學者應用；經數年來考核評量，並得鄰國日本諒解，為使此國際性工具書，俾以完整面目提供學者使用，特此全數景印，有了這部索引，任何問題都可以迎刃而解，可知此部索引存在價值是何等珍貴，謹此說明。

本公司編輯部 謹啟壬申年元月

簡介研讀大藏經的工具書

楊白衣

～法寶總目錄與大藏經索引之功用～

研讀大藏經是每一位佛子嚮往的終身大事，不研究則已，若想研究，則非賴特殊工具書莫辦。過去研究佛學，一、靠辭典，二、靠年表，三、靠經書目錄，但這些工具書已無法收到事半功倍之效，勢必另覓他途解決。

日本學者對此提供了最有力的工具書二種，其嘉惠學界之深，誠令吾人嘆為觀止！此二種工具書，一曰『法寶總目錄』，一曰『大藏經索引』。案此二部書之主要功用如下：

一、法寶總目錄之功用可查下列事項：

- (一)知著者而不知其著作。
- (二)知經書而不知著者、譯者。
- (三)知經書而不知有無異譯本。
- (四)知經書而不知何代、何年、何人之著譯。
- (五)知經書而不知內容章節。
- (六)知經書而不知在何處（第幾冊、幾頁）
- (七)知經書而不知有無前人之註解。
- (八)查著譯者之籍貫、俗姓、生卒年。
- (九)查經書之原名、漢譯名、日譯名。
- (十)查經書在各種版本之歸屬。

二、大藏經索引之功用有下列事項：

- (一)查法相、名數之所在以及定義等。
- (二)查人名、地名等所有固有名詞之原名，出現次數以及同名異人。
- (三)查某一術語在某一部經書中之用例、定義、異名及在各宗派中之觀點。
- (四)查五十種分類項目（詳如下表）之所在以及佛教的人生觀、宇宙觀。
- (五)查典籍之解題以及在國際上現今的研究成果。
- (六)查每冊藏經之詳細內容以及佛教之觀點。

『法寶總目錄』共三巨冊，除檢查上述各種要目之外兼有經錄的性質，不但收錄了各版本藏經，如『明藏』、『卍藏』、『卍續藏』等目錄，以及名庫所藏之書目，且有智旭大師的『閱藏知津』與陳實的『大藏一覽集』，可查每一部經律論（一七七三部）之解題、音義、傳記、疏鈔、目錄、纂集、護教、序讚、詩歌等，極為方便。

『大藏經索引』是根據日本『大正新修大藏經』（中華文化會館及新文豐出版公司影印之大藏經）前五十五冊所作之內容索引，這是日本大藏經學術研究會邀請六所佛教大學負責編撰的索引。其索引之計劃工作本以名學者小野玄妙博士（佛書解說大辭典作者）為中心，從民國三十二年開始著手，並已刊行了阿含部、目錄部、法華部各乙冊。這個計劃後來由於博士之逝世和第二次世界大戰之影響而不得不告中斷。直到民國四十五年由大谷大學、高野山大學、駒澤大學、大正大學、立正大學、龍谷大學等六所佛教大學重新提議，計劃把『大正新修大藏經』中之印度、中國、日本等三國選述之部分共計八十五冊之內容作成索引四十八冊以利學者應用。這六所佛教大學合議之結果，組成大藏經學術用語研究會，對內容的分類項目先行檢討後，決定以下列的原則展開工作。

一、以小野玄妙博士之計劃為藍本，分為分類項目別索引、音次索引、字劃索引、四角號碼索引、梵語索引、使其成為國際性之工具書。

二、用語之選擇，以漢譯大藏經為準，以總合研究之方法，每頁選出五十個學術用語，而把它配於五十種分類項目。五十種分類項目，以印度撰述部分為中心，而每項目之下再細分若干細目，其詳目如下：

1. 教 說：經典分類名目（三藏、九分教、十二分教等）……a通說 b三藏 c九分教 d十二分教
2. 教 判：有關大乘小乘，一乘三乘，密宗及各宗判教之用語……a通說 b大小乘 c一三乘 d各說
3. 教 理：表示教理之用語如三法印、空、中、緣起、佛性、如來藏等……a通說 b各說
4. 法 相：有關構成宇宙萬象的現象與本體之用語，與五位諸法有關連的名稱……a通說 b色法 c心法 d非色非心法
5. 惑 業：有關說明輪迴的惑障，業道之用語（除緣起、因果）……a通說 b惑 c業 d苦
6. 行 位：表示修行道位及得果的有關斷惑證理之用語……a通說 b凡夫位 c聲聞緣覺位 d菩薩位

- 7.戒律：有關戒律之種類、細目、持犯等之用語……a通說 b各說
- 8.禪觀：有關一般禪定、三昧、觀法之用語……a通說 b禪定 c觀法
- 9.世界：有關三界、六道等之用語……a通說（包括三界六道，二十五有）b天 c大 d地獄 e餓鬼 f畜生 g阿修羅 h其他
- 10.佛：有關佛的德性、身土、佛名、諸尊之用語……a通說 b德性 c佛身 d佛土 e佛名 f諸尊
- 11.人名：按照身分分類之固有名詞……a比丘比丘尼 b優婆塞優婆夷 c仙人 d外道 e菩薩 f其他
- 12.教派：有關學派、宗派之用語……a學派 b宗派
- 13.教團：有關僧伽、教團之法規及僧階之用語……a通說 b法規 c僧階 d其他
- 14.寺院：有關寺院之用語……a通說 b各說
- 15.信仰：有關各種信仰之用語……a通說 b各種信仰（包括稱名唱題等）
- 16.儀禮：有關佛事及僧衆等一般儀式、作法之用語……a通說 b佛事 c作法 d僧衆行儀
- 17.事相：有關密宗四度加行、灌頂行法之用語……a通說 b行法 c四度加行 d護摩 e灌頂 f其他
- 18.曼荼羅：有關密宗行法修行之本尊曼荼羅之用語……a通說 b各說
- 19.印契：有關密宗於行法時結印契（手印）之用語……a通說 b各說
- 20.陀羅尼：有關陀羅尼之用語……a通說 b真言（純密） c其他
- 21.外教：有關婆羅門教，印度諸學派、儒教、道教、神道之用語……a通說 b婆羅門 c印度諸學派 d儒教 e道教 f神道 g其他
- 22.咒術：有關幻化、咒術之用語……a通說 b幻化 c咒術
- 23.天文曆數：有關天文、時節、方位、算數、度量衡之用語……a通說 b日月星宿 c氣象 d時分 e歲月 f宿曜曆及吉凶日 g方位 h算數 i度量衡
- 24.地理：有關地理、地名之用語……a通說 b地名 c山名 d水名 e園林名
- 25.動物：有關動物之用語……a通說 b各說
- 26.植物：有關植物之用語……a通說 b各說
- 27.礦物：有關礦物之用語……a通說 b各說
- 28.物理：認為與物理，化學有關之用語……a通說 b色 c形狀 d聲音 e光熱
- 29.論理：有關因明，論理學之用語……a因明 b論理。

- 30.心理：認為與心理學有關之用語
- 31.倫理：有關倫理、道德之用語（例如恩義等）
- 32.教育：有關教育之用語。
- 33.生理衛生：有關生理與衛生之用語……a通說 b身體 c出生 d生理 e衛生
- 34.醫術藥學：有關醫術、藥學之用語……a通說 b療法 c病名 d藥
- 35.民族：有關民族、種族之用語……a民族 b種族 c其他
- 36.社會：有關家族、身分、階級等之用語……a通說 b家族 c身分 d階級 e其他
- 37.政治經濟：有關政治、法制、軍事、經濟之用語……a通說 b行政 c法律 d財政 e軍事
- 38.產業：有關一般職業之用語……a通說 b職業
- 39.風習：有關飲食、衣服、風俗之用語……a通說 b食物 c調味料 d飲料 e衣服 f裁縫 g風俗 h娛樂
- 40.言語：有關語言之種類、文字、文法、翻譯之用語以及梵語，巴利語等之音譯名詞……a通說 b種類 c文字 d文法 e翻譯 f音譯名詞 g其他
- 41.名數：以數目合成之用語
- 42.典籍：有關一般典籍之用語（包括品名）
- 43.紀年：有關年號、干支、王朝等之用語
- 44.文藝：譬喻、因緣、詩頌等與文藝有關之用語……a通說 b本生 c因緣 d譬喻 e文疏 f詩偈
- 45.音樂：有關音樂之用語……a通說 b音聲律呂 c調子 d聲譜 e典目 f樂器。
- 46.建築：有關建築之用語……a通說 b種類 c規構 d技法 e堂舍
- 47.圖像：有關佛、菩薩等的繪畫、彫刻之用語……a通說 b繪畫 c彫刻
- 48.工藝：有關美術工藝之用語……a通說 b題目 c形像 d素材 e技巧
- 49.器物：有關器具、佛具之用語……a通說 b佛具 c器具
- 50.雜語：不屬於上述四十九項目之詞彙

六家大學的分擔情形，到目前為止已出版者如下：

甲、印度撰述部

索引第一冊	阿含部	駒澤大學	大正藏第一、二冊
索引第二冊	本緣部	高野山大學	大正藏第三、四冊
索引第三冊	般若部	大正大學	大正藏第五～八冊

索引第四册	法華涅槃部	龍谷大學	大正藏第九、第一二册
索引第五册	華嚴部	龍谷大學	大正藏第九、一〇册
索引第六册	寶積部	大谷大學	大正藏第一一、一二册
索引第七册	大集部	龍谷大學	大正藏第一三册
索引第八册	經集部(上)	駒澤大學	大正藏第一四、一五册
索引第九册	經集部(下)	大谷大學	大正藏第一六、一七册
索引第一〇册	密教部(上)	高野山大學	大正藏第一八、一九册
索引第一一册	密教部(下)	大正大學	大正藏第二〇、二一册
索引第一二册	律部(上下)	駒澤大學	大正藏第二二~二四册
索引第一三册	釋經論部中觀部	駒澤大學	大正藏第二五、二六、三〇册
索引第一四册	毘曇部(上)	立正大學	大正藏第二六~二八册
索引第一五册	毘曇部(中)	龍谷大學	大正藏第二六~二八册
索引第一六册	毘曇部(下)	大谷大學	大正藏第二九册
索引第一七册	瑜伽部(上下)	立正大學	大正藏第三〇、三一册
索引第一八册	論集部	龍谷大學	大正藏第三二册

乙、中國選述部

索引第一九册	經疏部(一)	大正大學	大正藏第三三、三四册
索引第二〇册	經疏部(二)	大谷大學	大正藏第三五、三六册
索引第二一册	經疏部(三)	龍谷大學	大正藏第三七、三八册
索引第二二册	經疏部(四)	高野山大學	大正藏第三八、三九册
索引第二三册	律疏部論疏部(一)	龍谷大學	大正藏第四〇、四一册
索引第二四册	論疏部(二)	大谷大學	大正藏第四二~四四册
索引第二五册	諸宗部(一)	立正大學	大正藏第四四、四五册
索引第二六册	諸宗部(二)	大正大學	大正藏第四六、四七册
索引第二七册	諸宗部(三)	駒澤大學	大正藏第四七、四八册
索引第二八册	史傳部(上)	大谷大學	大正藏第四九、五〇册
索引第二九册	史傳部(下)	龍谷大學	大正藏第五一、五二册
索引第三〇册	事彙部外教部	高野山大學	大正藏第五三、五四册
索引第三一册	目錄部	立正大學	大正藏第五五册

丙、日本撰述部

索引第三二冊	續經疏部(一)	立正大學	大正藏第五六、五七冊
索引第三三冊	續經疏部(二上)	高野山大學	大正藏第五八、五九冊
索引第三四冊	續經疏部(二下)	高野山大學	大正藏第六〇、六一冊
索引第三五冊	續律疏部	駒澤大學	大正藏第六二冊
索引第三六冊	續論疏部(一)	大谷大學	大正藏第六三~六五冊
索引第三七冊	續論疏部(二上)	龍谷大學	大正藏第六五、六六冊
索引第三八冊	續論疏部(二下)	龍谷大學	大正藏第六六~六八冊
索引第三九冊	續論疏部(三)	龍谷大學	大正藏第六八~七〇冊
索引第四〇冊	續諸宗部(一)	立正大學	大正藏第七〇、七一冊
索引第四一冊	續諸宗部(二)	大谷大學	大正藏第七二~七四冊
索引第四二冊	續諸宗部(三上)	大正大學	大正藏第七四~七七冊
索引第四三冊	續諸宗部(三下)	高野山大學	大正藏第七七冊
索引第四四冊	續諸宗部(四)	高野山大學	大正藏第七八、七九冊
索引第四五冊	續諸宗部(五)	駒澤大學	大正藏第八〇~八二冊
索引第四六冊	續諸宗部(六)	大谷大學	大正藏第八三、八四冊
索引第四七冊	古逸部、疑似部	駒澤大學	大正藏第八五冊
索引第四八冊	悉曇部	大正大學	大正藏第八四、八五冊

本索引之最大特色為站在最新的研究成果，以梵文、巴利文等音譯，固有名詞為中心，盡量地附註羅馬字拼音的原文。

『大藏經索引』用途之大，吾人得由五十種分類項目窺見一斑，於此不但可見佛法大海之廣闊無邊，且能證明佛法之多面性格，其內容有人文科學、社會科學、自然科學，應有盡有。以前吾人研究佛學總有望洋興嘆，不知所措之感，現在有了這部索引，任何問題都可迎刃而解，吾人可隨意查閱自己所欲了解之事項。於此不但可查出該用語在大藏經中的所在（頁數），亦可比照各宗派對該問題之看法。不像已往想查尋一個問題往往得花費許多時間，仍無法解決問題，至於想比較研究那就更困難了。例如：有關「業」與「輪迴」之問題來說，可將原始佛教、部派佛教、大乘佛教中較代表性之經論，如：阿含經、俱舍論、成業論、中觀論等之有關「業」與「輪迴」之記載，依索引的指示抄錄出來，然後加以研究原義以及發展的過程。這豈不是輕而易舉之事。在未有索引以前吾人必須讀破整部經典，方能洞悉該問題之所在，而且仍無法收集完整的資料。

又例如吾人想知道佛教對生理衛生的看法，對國家、社會的看法，則可隨便找一本索

引，查閱有關這些問題之所在，然後找某一部經論研讀。這在以前是做夢也想不到的事，由此可知這部索引之存在價值是何等地珍貴了。

總之，研究佛學『法寶總目錄』與『大藏經索引』為學者不可缺的重要工具書。

收 錄 典 籍 解 題

本書は大正新脩大藏經第58卷・第59卷の索引であり、次に掲げる典籍から學術用語を抽出したものである。

經典番號	典 籍 名	撰 者
(第58卷)		
2 2 1 1	大日經開題 (1卷)	日本 空 海 撰
	大日經開題 (1卷・異本1)	
	大日經略開題 (1卷・異本2)	
	大日經開題 (1卷・異本3)	
	大日經開題 (1卷・異本4)	
	大日經開題 (1卷・異本5)	
	大日經開題 (1卷・異本6)	
2 2 1 2	大毘盧遮那經指歸 (1卷)	日本 圓 珍 撰
	附大毘盧遮那成道經心目 (1卷)	
2 2 1 3	大日經疏妙印鈔 (80卷)	日本 宥 範 紀
2 2 1 4	大日經疏妙印鈔口傳 (10卷)	日本 宥 範 撰
2 2 1 5	大日經住心品疏私記 (16卷)	日本 濟 暹 撰
(第59卷)		
2 2 1 6	大日經疏演奧鈔 (56卷)	日本 杲 寶 撰
2 2 1 7	大日經疏指心鈔 (16卷)	日本 賴 瑜 撰

No. 2211 は『大日經開題』である。一般に開題と稱するものの内容は、經論の題目を解釋し、經典の内容の大意を記するものをいう。その開題は、法要又は講演にちなんで作るのが通例であるといわれている。従って類本が多数ある。

『大日經開題』は、弘法大師空海が現わしたものであり、現在7本が残っている。その題名はいづれも巻頭の文句にちなんで後人が呼んでいる名である。その7本とは、「法界淨心本」・「衆生狂迷本」・「今釋此經本」・「大毘盧遮那本」・「隆崇頂不見本」・「夫三密法輪本」・「關以受自樂本」である。これらの内容や文章はもちろん同一ではないが、經論の題號を解釋し、『大日經』の徳を嘆じ、一經の要旨を述べることににおいてはかわりない。この中でも「隆崇頂不見本」では、初めに「孝子爲先妣周忌圖寫供養兩部曼荼羅大日經講文一首」とあり、「夫三密法輪本」には、「和尚爲升忌日講文」とある。それぞれ周忌法會のために『大日經』を講じたことが伺える。

これら七本は、『關以受自樂本』以外の六本は古版本があり、古くから行なわれていたことが理解できる。その中でも「法界淨心本」には、注釋書も多くあり、これまたさかんに研究されていたことも知られるのである。

これら七本は、『大正新脩大藏經』第58卷續經疏部3、又は『弘法大師全集』第1輯に全て収められている。以下この『大日經開題』についていささか解説をこころみる。

『大日經』とは『大毘盧遮那成佛神變加持經』の略である。梵本は現存せず、漢譯とチベット譯とがある。密教の根本經典の一つで、原典は7世紀の半ばごろ、西インドで成立したと推定されている。漢譯の『大日經』七卷は、唐の開元年間（713～741）に翻譯されたものである。經の前6卷に31品あり、その初めの第一住心品は、密教の教相（教理を組織的に解釋研究する方面）を説く。この品には眞言密教の主要な教義の大部分が含まれている。第二具緣品以下は、事相（實際上の修法に関する方面）を説いている。また第七卷は、善無畏三藏の將來によるもので、5品からなるが、ここでは供養法を説くのである。

次に漢譯『大日經』の注疏で、最も重要視されるものが二つある。一つは『大日經疏』20卷である。『大日經』七卷のうちの初めの6卷31品について、善無畏（637～735）が講説し、一行（683～727）がこれを筆録したものである。他の一つは『大日經義釋』十四卷で、一行の没後、智嚴によって再治されたことが溫古の『義釋序』によって知られる。前者は眞言宗（東密）で、後者は天台宗（台密）で重視されて今日に至っている。したがって今ここでは、『大日經開題』と關係するのは、漢譯『大日經』の原本と、『大日經疏』ということになる。

『大日經開題』は、『大日經』つまり『大毘盧遮那成佛神變加持經』という經題を解したものであり、それによって『大日經』に説かれる深趣を明らかにしているものである。『大日經開題』は前述の如く七本あるが、その内容ということになるとそれほど異なったものではないので、以下にその内容を一括して明らかにしていきたい。

『大日經開題』は、構成のうえでは大約次のように分けられよう。

驚覺衆生並びに經の大意の文が二割、大毘盧遮那成佛の解釋が二割、神變加持が二割、住心品について二割、その他が二割と配當することができよう。

大師の主張は、一概にいえば自證と化他の二面において、『大日經』を解説しようとしている。この點からいえば、經題がその部分にあたり、「大毘盧遮那成佛」としてあらわす如來の自證を示すところと、「神變加持」としてあらわす化他の部分がその要點となろう。以下はこの部分を見ることによって『大日經開題』の主意にふれていきたい。

(1)大毘盧遮那について。

毘盧遮那とは、日の別名である。大毘盧遮那とは大日のことである。この大日如來を一切如來の本地身であるところの法身如來の名號とするのである。密教の佛身説から大日を見るのである。つまり大日如來はすべてのものの存在生成のために、依り所となる根本的な如來なのである。この大日如來を『開題』においては「毘盧遮那とは、或は日の別名と云う。除暗遍明を義となす。或は光明遍照といい、或は高顯廣博と説く。」とある。そして通常この大日如來に三義の大徳を持たせるのである。第一は、如來の大智の光明が、内外晝夜の別なく、一切所に遍じて大照明をなし衆生の迷暗を除く、これを「除暗遍明の徳」とする。第二は、太陽が草木等を成育せしめ、また世間の衆務を成ぜしむるように、如來の日光も遍く法界を照らし、衆生の善根を開發し、世間出世間の殊勝の事業を成就するが故の「能成衆務の徳」がある。第三は、世間の日がよく重雲に耐えて滅することなく、また猛風雲が吹いても、その顯照を増大せぬように、如來の日も平等、常時にして生滅を超えるところの「光無生滅の徳」がある。大日如來はこの三徳によって、無量無邊の功德を表わすのである。

(2)神變について。

『大日經開題』『法界淨心本』には、神變を次のように解している。

神變とは測られざるを神といい、常に異なるを變と名づく。すなわちこれ心の業用なり。始終知り難し。三種の凡夫識知することをあたわず。十地の聖者も未だその邊を知らず。ただし佛のみよく知り、よく作す。故に大神變という。此の神變は無量無邊なり。大に分って四となす。一には下轉神變、二には上轉神變、三には亦上亦下、四には非上非下なり。下轉とは本覺の神心より隨緣流轉して六道の神變を作す。又聲聞、緣覺等も分に神通變化を作す。並びに是れ迷少の神變なり。法佛の如來大悲大定より能く難思の事業を作して、聾聵の耳目を驚覺したまう。是の如く等の事は下轉神變なり。上轉神變とは、若し衆生あって菩提心を發し、自乗の教理を修行し、昇進して、本覺の一心を證すれば、則ち能く迷識の神心を轉變して、自乗の覺知を證得し、一切の難思の妙業、心に隨ってよく作す。即ちこれ上轉神變なり。亦上亦下とは法界の身雲、恒沙の性徳、形として形ならざることなく、像として像ならずということなし。一切の形像をもって一切の法性塔となす。是れ則ち上に臨むれば則ち下、下に臨むれば則ち上な

り。並びに皆四種身を具して大神通を起す。故に亦上亦下神變という。非上非下神變とは、非有爲、非無爲の一心の本法と、及び不二の中の不二の本法とは、諸の戲論を越えて諸の相待を絶す。難思の本、變化の源なり。故に非上非下神變という。

上の如く大師は神變を四つに分類されている。下轉神變、上轉神變、亦上亦下神變、非上非下神變がそれである。この分類は、従来は『大乘起信論』の注釋書である『釋摩訶衍論』の説によっているとされている。しかし『釋摩訶衍論』を見ると（大正藏 32 卷、641 頁中）上流轉變と下流轉變の二つが見出されるのみである。従ってこの件においても従来言われている如く、四種の神變の考えは、大師が『釋摩訶衍論』を典據として案出せられたものとしておくのが妥當であろう。大師の四種の神變については、その後の先德によって次のように深められている。

下轉神變。この神變は三身の立場で考えられるとする。『開題』に「本覺の神心より隨緣流轉して六道の神變を作す」ということ、これは等流身による神變である。次に「聲聞・緣覺等も分に神通變化を作す」とあるのは變化身による神變である。次に「法佛の如來大悲大定より能く難思の事業を作して、聾聵の耳目を驚覺したまう。」これは他受用身とみなされる。これらの三身は、もちろん自性法身から現われたものであり、各々の立場でそれぞれに衆生を度するのである。したがってこの神變を「從果向因の法門」であるともするのである。

上轉神變。行者が菩提心を發して修行して、佛果を得ることをいう。つまり行者の向上過程を神變としてとらえていき、行者が覺りを得たのちも如來と同様、不可思議の妙用を心に從って發揮することが出来る。これも又神變であるとするのである。この神變を「從因向果の法門」であるともいうのである。

亦上亦下神變。『開題』に「形として形ならざるということなく、像として像ならずということなし。一切の形像をもって一切の法性塔となす」とあるように、この神變は萬物の形像すべてが如來の顯現であるとの立場である。全てが相互に働く、相待的な立場を指している。

非上非下神變。『開題』に「非有爲・非無爲の一心の本法と、及び不二の中の不二の本法」とあるように、絶對の神變の境界のことをいっている。そこにおいては、生滅門も眞如門もともに超越した上の神變のことである。以上の如くに、大師は四種の神變を説くのである。これらはいずれも佛身論の中で、大日如來が加持身を流出して、衆生救済のために降下される立場で説いているのである。

さらに説明を加えるならば、『大日經開題』『法界淨心本』中に、「神變加持を合して一となす。即ち法應化の三身、次の如く知ぬ可し。又次に三大に配して釋せば、大毘盧遮那とは體なり。成佛とは相なり。神變加持とは用なり」とある。ここでは法應化の三身つまり佛身論の中で神變を見ている。また三大の中で神變をみている。これらはいずれも主體と離れて

客體は考えられない。またその逆も考えられないといったこと、つまり大日如來（法身）と離れて、他のものは考えられない、如來と離れて加持身の妙用とはならないことをいっている。加持身即法身如來ということで、四種の神變といっても、法身説法の現れであるにすぎないことをまたいっているのである。この考えは、また『大日經疏』の下轉神變の釋（大正藏39卷579頁中）と一致しているのである。

(3)加持について。

『大日經開題』「法界淨心本」には、加持を次のように解している。

加持とは、古くは佛所護念と云い、又は加被という。然れども未だ委悉を得ず。加は往來涉入を以て名となし、持は攝して散せざるを以て義を立つ。即ち入我我入是れなり。阿等の六字は法界の體性なり。四種法身と十界の依正とは、みなこれ所造の相なり。六字はすなわち能造の體なり。能造の阿等、法界に遍じて相應し、所造の依正は、帝網に比して無碍なり。此も往かず彼も來らずと雖も、然れどもなお法爾瑜伽の故に、能所なくしてしかも能所あり。

故に頌に曰く、

六大無碍常瑜伽	四種曼荼各不離
三密加持速疾顯	重重帝網名即身
法然具足薩般若	心數心王過利塵
各具五智無際智	圓鏡力故實覺智

上のように大師は「入我我入」を加持の基本としている。これは『即身成佛義』においても、最も基本的なものとして示されている。即ち「加持といふは如來の大悲と衆生の信心とを表す。佛日の影、衆生の心水に現ずるを加といい、行者の心水能く佛日を感じずるを持と名づく」とある。行者がよくこの理由を理解し觀念すると、行者と佛の三密相應ということによって、現實のこの身が成佛するというのである。

この「入我我入」という加持の基本は、密教と佛教の區別を明らかにしている。佛教の覺りの求め方は、常に煩惱の否定という行爲をとおして、眞實に近づくのである。つまり否定をとおして覺體を求めるあり方が佛教であるが、今ここでいう「入我我入」とは、行者の行爲に對する佛の慈悲心なるものが表面に現われている。佛身觀の中で佛の慈悲につつまれているのが密教の行者であるとする。

それを「六大無碍」として説明されている。六大とは五大と識大のことである。五大とは行者が持っている人間的な行爲の全てであり、識大とは如來の慈悲的なものにあたる。行者がこの識大を理解した時に、相互に渉入するという意味が理解でき、六大という覺體が實現するのである。そこに密教の智慧がある。『大日經開題』中においても、六大そのものが法界の體性であるとし「六大無碍常瑜伽」としている。同様にこの境地を「四種曼荼羅」において、また「三密加持」において説明するのである。そして結果として、いずれも相互渉入

という行爲つまり「入我我入」ということによって得た覺體、それが圓融無碍の世界なのであるとするのである。

『大日經開題』には、前に示した如く二頌八句を説いている。この二頌八句は、『即身成佛義』のものと全く同じである。そこで二頌八句について『即身成佛義』の解釋を見ると、

釋して曰く、此の二頌八句以て即身成佛の四字を歎ず。即ち是の四字に無邊の義を含めり。一切の佛法は此の一句を出でず。故に略して兩頌を樹てて無邊の德を顯わす。

とある。即ち『即身成佛義』において明らかな如く、大師は二頌八句をもって即身成佛を顯わしているのである。『大日經開題』中でも二頌八句に對する考えは全く同じである。故に『大日經開題』の意圖するところは、『大日經』の中において大師が覺證した即身成佛を吐露したものである。

『大日經』は、天平時代にすでに數本が請來されている。しかし我が國において『大日經』の本格的な研究は、弘法大師をもって初めとせねばならない。大師によって初めて『大日經』の正しい理解が得られ、その上にたつて眞言密教の體系が引きあがったのである。以上によって7種の『大日經開題』の主旨を述べ終った。

次に、『大日經開題』と命名しているものが他に一本ある。紙本卷子、三寶院藏のもので新國寶に指定されている。これも原本には題名は書いていないが、後人の手によって表紙の外題に「大日經開題草稿弘法大師筆一卷」とある。六紙の斷簡を繼合させた卷子本であり、首尾一貫した文章として書かれたものではない。時おりメモ的に書かれたもので、行間にあとから追記したと思われるところも多くある。

その内容は、『大日經疏』の所々を抜き出してメモしたものであり、『疏』第1より第20までが抜書きされている。故に『弘法大師全集』の編者長谷實秀師は、この1巻は『大日經開題』と稱すべきものではないとし、『大日經疏要文記』と名づけて『弘法大師全集』に収載している。ともかく内容からすれば『大日經開題』とはいいいがたい。しかしその記するところは『大日經疏』の中にことごとくある。これは弘法大師當時すでに『疏』が我が國にあったのであろうか。または大師の『請來目錄』の中に『大日經』はないが、『疏』が含まれていることから考えると、『疏』は大師が入唐において持ち歸ったものであろうか。ともかく本書は、『大日經』の研究に際して、『大日經疏』を傍らにおいて、兩者を對照しながら、記憶すべきところを書き出していったものと考えられる。ともかく本書が、大師の眞筆とすれば『大日經』の研究に没頭していた大師の姿を垣間見ることが出来るのである。

No. 2212『大毘盧遮那經指歸』1巻は、入唐求法沙門珍述とあるごとく智證大師圓珍(814~891)が撰述したものである。本文の主となる部分は、まず「大日經原文」を出し、ついで「釋云」として『大日經義釋』を述べ、ついで「今案」として自らの意見を示している。つまり文中には「釋云」とあり、「疏云」とは言っていないことに注目しなければならない。このことより敬光師は、『講翼』で「智證大師は45歳にして歸朝した後に、義釋目錄を製し